

# 瀬戸内文学と『とはすがたり』

——付、杉本苑子『新とはすがたり』——

## 要 旨

瀬戸内晴美氏（法名は寂聴師）、その文学と大納言久我雅忠の女、すなわち後深草院二条、その自伝『とはすがたり』との交渉は深く、長く、篤い。宿縁に結ばれているようだ。たんに、『中世炎上』と原典との関連ではすまない。また、その現代語訳者にとどまらぬ。何んと、十年も集注して固執し、やがて卒業して行く。

おりから、氏自身が次のように回顧した、その時期にあたる。

昭和四十一年に「一つの心理的転機」をきたして、「流行作家的生活を清算」（自筆『年譜』）したいとの願いにそそられ、歳末、京都に転居してみる。東京との往復、二重生活を試みているのだ。なぜかについて説明はない。以来、ひそかに「私の文学変革」、「脱皮」はすすみ、昭和四十三年度には、それが「本格的」（『わが文学の履歴』、いずれも『昭和文学全集25 深沢七郎・水上勉・瀬戸内晴美・曾野綾子・有吉佐和子集』昭六三・四・一刊 小学館に収載）になったという自覚を持つ。さらに延長線上には、昭和四十八年十一月十四日の得度、出離がある。自然な、ひとつの帰趨であるろう。一念発起とか、翻然として悟るとかの挙ではない。

町<sup>まち</sup>

田<sup>だ</sup>

栄<sup>さかえ</sup>

いま、瀬戸内文学の昭和四十年代を眺めわたして、転換期を設定するとき、推力の枢要部に『とすかたり』を置かなければなるまい。

後深草院二条に、氏は等身大の、血脈たる自己を見出したのだ。劇的ですらある。時代性を別してふたりの資質、性行、嗜好はあまりに酷似している。ほとんど寸分の狂いなく、重ね合わせられよう。両者の遭遇は、約七百年を隔てた骨肉の呼応と称しても、過言ではあるまい。

この至純な邂逅によって好伴侶を得るが、同時に自己凝視、自己啓発をもたらす。いや、かえって、それを強いられたかも知れない。多年にわたって、『とすかたり』に固執するゆえんである。氏の心酔、長い同行と追隨のうちに触発され、促進され、督励され、そして自得されたものは何か。それが、ゆるやかな転換へといざない、おのずから転換期を形成する。

内実を明らかにしなければならぬ。瀬戸内氏と『とすかたり』との交渉の生きた現場に立ち会って、検証する必要がある。

具体的に、

。『とすかたり』との出会い

。受容——自己凝視と発露、出家出離

。残された問題の体験的自得

などによって、考察を試みたい。『とすかたり』という作品の特質も立ち現われて来よう。

たとえば、『煩惱夢幻』と『この救われざるもの——かげろふ日記私考』との冒頭部、ふたつを対比して見ることが出来る。遠く流通している。共に「ものを書く女」、「女がものを書く」ことをテーマとする。紫式部を挙げて論じる点も同工だ。しかし、異曲であった。とりもなおさず、それぞれの時点で抱いた、作家瀬戸内氏の自己省察にほかならない。質的な、著しい差異を呈す。レベルが違う。従って、論旨は同じ平面に並ばない。

前者中に、次のような一節がある。後者を語る自己の変貌を、まさか、予想もしない記述であつたらう。

幾たり、子をつぎつぎつくっても、男はそのことによつて一向に喪失感を感じないから、自己の精神的種族の遺伝などということをおもいつくのだらう。それにくらべて、子を産むということ、肉体からも精神からもおびたしい喪失感を如実に感じさせられる女が、尚その上、自己の精神的種族を遺したいと希うこと自体、もう並々ならぬ私の強さであり、相当な自己拡張型の精神的な女なのである。こういう生理的な、男まさりの「ものを書く女」観を誇示する作家が、その作品の完稿直後に『とはすかたり』の筆者、後深草院二条に出会う以前に、接触した証跡はない。鎌倉中、後期の宮廷で最高の貴顕四人に通じ、四人の子女を生み、さらに妊娠もしている(『とはすかたり』中に出産したかどうか、記載を欠く)女性である。自意識も強い。氏は、自説の実

証を二条の上にも見たに違いない。血脈との遭遇に親近感をそそられたであろう。後者はそれに親昵し、精通して十年を経た執筆である。

今も昔も、ものを書く女などというものは、表面どのようにしおらしくつくりつてみせたところで、心に鬼を棲まわせている。角もまだ柔い小鬼であろうと、耳まで口のさけた見るも怖しげな大鬼であろうと、それが心の臓を噛み破る修羅の鬼であることにはまちがいない。心に鬼をかくした女の仮面がいつまでもはがされずに置くのだらうか。

叙述は自在に、やさしく、ユーモアをたたえる。胸裡に、「修羅の鬼」をかかえた「この救われざるもの」の痛ましさが、自己憐憫につつまれて観照されていよう。それは決して、「自己拡張型の精神的な女」の言進の果て、疲労困憊した末路ではない。

氏は変質、転換したのである。外向から内向へ、動から静へ、浅から深へ、と。ますます辛辣で、いよく沈潜、深化した自己省察であろう。字義の上で、「ものを書く女」の顕示欲、「女がものを書く」煩惱は無量無限で、業火に焼かれた自己を吐露する。「死んでも人にしられたいない秘密」、その告白を『とはすかたり』に看取していたのだ。かつて「夢幻」に、泡沫に燦たるいのちを鼓吹して来た勇姿や威風はない。なればこそ、再度、同工の文章をもって包含する。前身を否定するという体ではない。後身が推移した到達点である。前者が出発であった。中間に、転生の契機に働く『とはすかたり』交渉が介在するだらう。

瀬戸内文学と『とはすかたり』との関連を考察するには、『煩惱夢幻』

より始めなければならぬ。『煩惱夢幻』の作者に訪れた、『とはすがたり』邂逅だからである。それゆえに、固執されたのである。

次のような『とはすがたり』関連資料リストをまとめ、覚書としておく。わたくしの考察は、これらの範囲内に納まるだろう。

1、『煩惱夢幻』(昭四〇・二・七付発行)昭四〇・一〇・一〇付発行『週刊読売』に三六回連載。題字は町春草、さしえは村上豊)昭四一・九・

二〇刊 新潮社

章名「むらさき・こうばい・すおう・かきつばた・やまぶき・しおん・ききよう・おみなえし・あかね」

2、『祇園女御』(昭四二・四・一六付)昭四三・五・三付『東京新聞』朝刊ほか中日・神戸・西日本・北海道新聞に三八〇回連載。題字は町春草、さしえは中尾進)昭四三・一〇・二八刊 講談社

序章「その後の世に(一)〜(十)」(昭四二・四・一六〜四・二五付掲載分)——作品の緒言、自解を『とはすがたり』解説でもって行なう。

。「特集・さすらい人生」中の『放浪について』(昭四四・五・一発行『随筆サンケイ』)

3、『とわすがたり』(昭四五・一・一発行第24巻第1号)昭四五・一二・

一発行『婦人生活』第24巻第14号に一二回連載。題字は檀塚哉、絵は宮田雅之)

章名「春のなやみ・花ひらく・きぬぎぬ・雪の曙・罪の子・花盗」

人・恋の呪い・青葉の憂い・恋の糸・煩惱無限・嵯峨の冬・とりべ野」

。昭和四六年度の一年間、宮内庁書陵部研究員の八嶋正治氏について、週一回、『とはすがたり』の講義を受ける。テキストは松本寧至氏の訳注の角川文庫『とはすがたり』上下巻を用い、上巻を読了したという。(注)

。「徳島の人形廻し」(昭四六・四・一五付『サンケイ』夕刊、東京版三面、大阪版五面に掲載)

。「黒髪と藤の花」(昭四六・七・一付発行『風景』第12巻第7号通巻一三〇号)

4、『中世炎上』(昭四六・一〇・一五付発行第76巻第46号通巻二七五九号)昭四七・一〇・二〇付発行『週刊朝日』第77巻第45号通巻二八一五号に五四回連載。題字・えは宮田雅之)昭和四八・三・三〇刊 朝日新聞社

章名「新枕の女・雪から花へ・初鶯・墨染桜・おだまき・かば桜・春おぼろ・夢のなごり・おもかげ・輪廻・鴛鴦・秋風・途上・煩惱無限」

発端部二章を創設

5、『日本の古典8王朝日記随筆集II 大鏡・方丈記とわすがたり・徒然草』(昭四八・一・三〇刊 河出書房新社)の『とわすがたり』現代語訳を担当。なお『大鏡』は中村真一郎氏、『方丈記』・『徒然草』は

佐藤春夫氏が担当して現代語訳。

章名「巻一・二・三・四・五 巻二・一・二・三 巻三・一・二・

3 巻四 巻五」(巻四・五は抄記)

のちに、新潮文庫『現代語訳とわづがたり』(昭六三・三・二五刊 新潮社)に収録 著者後深草院二条、訳者瀬戸内晴美、注解・解説 八嶋正治

。昭和四十八年五月十一日、早稲田大学春季講演会にて、『と  
はづがたり』をめぐって——中世の時代と文学——と題して  
講演 於早大大隈講堂

6、へ昭和四十八年十一月十四日、奥州平泉中尊寺にて得度、今春聴  
(東光)大僧正の門に入る。法名は寂聴とす。得度は世間を騒が  
せたが、自分としては内的欲求の自然の波に従ったもので、平静  
であった。

昭和四十九年一月、東京都文京区本郷一―二七―八の仕事部屋、  
京都市中京区西の京原町六八の自宅をたたみ、京都上高野の仮寓  
に移る。

四月二十六日より六十日間、比叡山横川行院にて  
四度加行を受く。十二月二十五日、京都市右京区  
嵯峨鳥居本仏餉田町七―一の寂庵に入る。のち宗  
教法人単立寺院、曼陀羅山寂庵。

昭和五十六年一月、徳島市にも寂聴塾を開き、その発展した徳  
島塾(昭五七・四―昭五九・三)を開く。

昭和六十二年五月五日、岩手県二戸郡浄法寺町の天台寺に住職

として晋山、岩手と京都とを往復し、荒廃した寺の復興につくす。  
権大僧都となる。)

注 この項は、自筆『瀬戸内晴美年譜』数種より抄出、編集したもので  
ある。

7、『瀬戸内晴美長編選集 第十二巻 中世炎上・輪舞』(昭四九・一  
一・二〇刊 講談社)所収パンフレットの自筆「解説(十二)」

。『この救われざるもの——かげろふ日記私考』(昭五一・九・  
四発行25号―昭五四・二・五発行『すばる』39号に一四回連載。昭五  
二・八・五発行30号のみ休載)

8、純文学書下ろし特別作品『比叡』昭五四・三・二〇刊 新潮社  
章名「第一章・第二章・第三章・第四章・第五章・第六章・  
第七章・第八章・第九章」  
後深草院二条考

9、「後深草院二条——『とはづがたり』昭五七・二・一五刊 福武  
書店『私の好きな古典の女たち』所収

10、『古典を読むとはづがたり』(岩波書店)ただし、予告のみで未刊に  
終わる。

付 小田仁二郎『空ゆく月』(昭二八・一〇・五発行『文學者』40号)

\*

杉本苑子『新とはづがたり』(昭六四・一・四付―平成元・一一・一  
一付『東京新聞』夕刊ほか中日・西日本・北海道新聞に二五六回連載。

画は深井国)平成二・三・二六刊 講談社

章名「琵琶をひく少女・ムクリとワクワク・東二条院・春雪・鶴の毛ごろも・法皇崩御・治天の君・首をはねろ・八幡社頭・風の集団・生別死別・蒙古来たる・嵯峨の一夜・粥杖・明石の上・断絃・百鬼跳梁・妙好華・弘安の役・鎌倉みやげ・八条院領・散りざくら・花に問え・霜月騒動・卒寿の姥・誤算・人喰い鬼・捨て聖・権謀術数・逆転・野萩の道・跡の白露」

富岡多恵子「書下ろしエッセイ『古典の旅』とはすがたり』」平成

二・一・一六刊 講談社

章名「<sup>卷一</sup>十四の春・雪の曙・父と娘・ふたりの子・道芝・尻を打ち

あう・有明の月・雲がくれ・死ぬほどの悲しさ・<sup>卷三</sup>ふたりの男性・

兄と弟・有明の子有明の死・<sup>卷四</sup>家出旅立ち・鎌倉・東国の旅・奈良

へ・<sup>卷五</sup>再会・潔白の証明・西国へ・死と別れ・父母の形見」

最初期の『とはすかたり』研究文献

山岸徳平『とはすがたり覚書』(昭一五・九・一『国語と国文学』第17巻第

9号)

\*

宮内庁書陵部編、芝葛盛・山岸徳平監修『<sup>所蔵</sup>桂宮本叢書第十五巻物

語一 とはすかたり』昭二五・三・二〇刊 養徳社 のちに『むくら』

を増訂再版昭三二・九・三〇刊

\*

富倉徳次郎訳『とはすがたり』昭四一・四・二〇刊 筑摩書房

解題・口語訳・原典・注釈・校異・補注・索引・とはすがたり年譜・関係系図・関係地図

中田祝夫監修、呉竹同文会著『とはすがたり全釈』昭四一・七・三一刊 風間書房

次田香澄校註『日本古典全書とはすがたり』昭四一・一一・二〇刊 朝日新聞社

\*

松本寧至訳注『とはすがたり』上・下巻 角川文庫 昭四三・八・一五刊、昭四三・一二・二五刊 角川書店

注・補注・現代語訳、参考資料・系図・地図・年譜・解説・参考文献

上巻に卷一・二・三を、下巻に卷四・五を収録

\*

伊地知鐵男編『とはすかたり一〜五』全五巻五冊 昭四七・一・二〇〜昭四九・五・三〇刊 笠間書院

二

現存の五巻五冊、袋綴じ、美濃判の『とはすかたり一〜五』は宮内庁書陵部所蔵の、唯一の伝本である。言うまでもなく、二条の自筆本ではない。それは桂宮本と呼ばれるひとつで、各巻(冊)別筆、江戸初期に転写されたものらしい。表紙に貼付した小短冊形の題簽は、すべて靈元天皇(在位期は一六六三〜一六八七年)の筆蹟によるといふ。寛文三年から

延宝、天和を経て貞享四年まで、徳川幕府では四、五代家綱、綱吉のころに当たる。

『桂宮本叢書』の「序」によれば、桂宮家は後陽成天皇の同母弟、智仁親王が祖となって天文十七（一五八九）年に始まり、仁孝天皇の第三皇女、桂宮十一世淑子の逝去によって、明治十七（一八八四）年に廃絶したという。天皇家に近いところから禁裏の相伝本や、歴代の親王宮の蒐書、書写された和歌、物語などを多く所有し、伝承して来た学芸の家である。

伝来の『とはすかたり』がいつ、誰れくによって筆写されたか、厳密にはわからない。伊地知鐵男氏は「後西、靈元天皇の時代に、いわゆる禁裏複本事業の一つとして、当時の公卿たちの手」になったという。

その原本、といっても書写本の内訳、体裁は少しく縮小した複製本、すなわち伊地知編・解説『とはすかたり一く五』全五巻五冊があつて、その様相をほぼ窺うことができる。ただし、袋綴じではない。書中に著名、序、奥書の類はない。影印本ということでは、ほかに解説西沢正二の『とはすかたり 勉誠社文庫134・135』上下（いずれも昭六〇・一〇・五刊 勉誠社）もある。

長く埋もれていた、秘匿といいかえるべきかも知れない、『とはすかたり』を発掘し、これまた、たまく禁を破って、紹介したのは山岸徳平『とはすかたり覚書』である。昭和十五年九月号『國語と國文学』誌上、十五ページの巻頭論文がそれだ。『増鏡』に有力な資料を提供した、採択された女流日記という主旨である。ほとんど無名のままで室町、江戸期、近代を通して漏れずに伝来したらしい。密閉された、狭い範囲内

に愛惜されて来たようだ。一種の秘書、禁書に扱われていたのか。それは、多分勅勘を蒙って御所を追われた、後深草院側近の上藤女房が暴露した宮廷愛欲の物語、これに対する処遇なのであろう。いとおしまれながらも、やはり内容、筆者ともに憚られるのである。

今度は、山岸が時勢に配慮しなければなるまい。論文に、作品全貌は巧みに臙化して、完全には開放しない。が、さすがに高い評価を与えている。

「内容も可なり深さを持ち、心理描写、即ち告白や感懐は『問はず語り』である為にか、相当深刻」な、「蜻蛉日記や更科日記にも匹儔すべき」、「鎌倉時代の文学史には、当然特筆せられなければならない」作品である、と。すでに、正鵠を射ていよう。——なおも、『とはすかたり』は潜航を続けて行く。

山岸の『とはすかたり』遭遇談は、中田祝夫監修・呉竹同文会著『とはすかたり全釈』に寄せた「はしがき」や、『日本古典全書とはすかたり』所収「附録」の『とはすかたり』の「思出」に詳しくうち明けている。昭和十三年の冬、宮内府図書寮の書籍目録「地理」の部で発見したという。後者は、『とはすかたり』を初めて活字化、編入した『所蔵圖書寮桂宮本叢書』全二三巻（昭二四・三・五〜昭三八・九・一〇刊 養徳社）の企画、刊行に言及して興味深い。

新しい古典『とはすかたり』が文学史に記載、登録されるのは、まず『岩波日本文学史 第四卷 中世』の石田吉貞著『中世の日記・紀行文学』（昭三三・四・二四刊 岩波書店）であろうか。注釈書の公刊に大きく

先んじている。ついで市古貞次著『日本文学史概説』（昭三四・四・一五刊 秀英出版）、くだつて『改訂日本文学史 中世』（昭三九・六・一五刊 至文堂、従つて初版昭三〇・一一・二五刊に『とはすがたり』は未登載）に西尾光雄氏が「増補訂正」している。これらの記述を、たとえば『日本文学全史3中世』（昭五三・七・一刊学燈社）中のそれと対比できるが、少なくとも昔日の感とか、褪色の感とかはない。かなり明確な把握がなされていたからだ。

それらは、専門家たちの『とはすかたり』研究の活況を呈している、地下の動向を反映していよう。第二回配本『桂宮本叢書』第十五巻に『とはすかたり』が翻刻、収録されて、にわかには学界の焦点に立ち、熱い注視を浴びていたのである。ちなみに、叢書中にこの第十五巻がもつとも版を重ね、三版（昭四一・五・一〇刊）まで確認される。

一般の読書人には題名のみ知りえて、作品全貌の入手できぬもどかしさをかこつ時期であった。『桂宮本叢書』第十五巻の初版に、増訂再版（昭三二・九・三〇刊）にとどいても、本文の晦渋さ、難解さに跳ねかえされる時点である。焦躁感といえよう。その期間は、充分にながい。

時を同じく、加えて、古典文学に制作領域を拡張、王朝女流日記に関心を集める瀬戸内氏がある。『とはすがたり』との邂逅は唐突で、時機的なものである。好機に遭う。この流行作家がかねてより、つねに鶴首していたわけではない。しかし、『とはすがたり』を呼びこみ、受け入れる基盤は、直接には『煩惱夢幻』の構想、執筆、完稿をたどつて醸成され、助長されよう。

待たれていた『とはすがたり』注釈書、詳細な校注書がようやくにして公開、しかも、あいついで大著が刊行されたのは昭和四十一年度である。『とはすがたり』研究史に画期をなす。

順序には富倉徳次郎、水原一、星田良光、鈴木儀一、安藤唯夫、小田倫司、神谷道倫の七氏による共同研究、呉竹同文会のメンバー水川喜夫、和田久、杭迫晴司、倉本光雄、落合尚郎の五氏による共同研究、および次田香澄氏の校注、研究の三著である。

いずれも読書人に歓迎され、久しい渴望をいやしたことは想像にかたくない。わけでも、後深草院二条その人に対面しえた、『煩惱夢幻』の作者は息をのんで、読み耽つたに違いない。

『煩惱夢幻』は大規模な古典涉猟、利用にもとづく氏の最初の長編小説である。和泉式部を中心に、その男性遍歴を華麗な絵巻物に仕上げている。『和泉式部日記』、正統『和泉式部集』に取材しただけではない。

『萬葉集』、『蜻蛉日記』、『枕草子』、『紫式部日記』、『大鏡』、『栄華物語』、『古今著聞集』など。古典資料を博搜して、そこに空想をふくらませ、氏の血脈たる女主人公を創造して活躍させる。この方法が存分に発揮されている。以降、広く手がける王朝ものの嚆矢である。

なせに、和泉式部に着目し、作品化したのか。——『煩惱夢幻』の連載に先きだつて、昭和四十年一月三十一日付発行『週刊読売』は、新連載小説の予告「瀬戸内晴美さんの王朝女人」を掲げる。そこに、「作者のことば」が次のように記されている。

私の少女のころから、いつとはなく心に忍び込み、しっかりと心



の襷ひだの中に住みついてしまった一人の女の面影があります。／和泉式部です。あんまり長い歲月、彼女は私のうちに住みついてしまったので、いまではもう、私と彼女の呼吸の区別もつかなくなってきました。／いつか書きたいと思っていた、この夢多い、多情多恨な王朝の女を、もう書ききれぬ年齢に、私も達したように思います。

古典とは「いつとはなく心に忍び込み」、長期にわたって温存されたものである。それに初めて接した時期も、きっかけも淵源にさかのぼって究めることはとうてい出来ない。模糊としてしまう。

自筆の『瀬戸内晴美年譜』などによると、氏は徳島市新町尋常小学校の三年時、九歳のころから小説家を志したという。文学好きの担任教師から特別に課外指導を受けて、北原白秋や島崎藤村を知り、小説を読み始める。古典に親しむのは、県立徳島高等女学校に在学中である。国語の時間とは別に、「副読本の時間」という古典ばかりを読む時間があり、古文を身につけたという。もともと、人形廻しが浄瑠璃のさわりを語って、飴を売りあるく土地柄である。古典になじむ資質は、生来そなわっていたらしい。

従来、書いていた評伝ものの、鮮烈な光芒を放つ『田村俊子』(昭三六・四・二〇刊 文芸春秋新社)の田村俊子、『かの子撩乱』(昭四〇・五・一五刊 講談社)の岡本かの子、同時執筆の『美は乱調にあり』(昭四〇・四・一二『文芸春秋』に九回連載、昭四一・三・一刊 文芸春秋)の伊藤野枝らに、この「和泉式部」は連続し、より空想豊かに造型される。彼女たちは、い

ずれも作家の分身に違いない。「私と彼女の呼吸の区別もつかない」と。積年の親近だけによらぬ。右につづく「作者のことば」が詳しく自証しよう。

誤解される人間の、美しさと哀しさにしか、私は魅力を感じません。和泉式部の華麗すぎるのちは、千年近い歲月をさまざまに誤解や伝説のなかで生き続けてきました。彼女の受けた誤解のなかから、女の真実となげきと煩惱のほむらの美しさを、心をこめて書きあげたいと願います。

固く身構えている。ウーマンリブのうたわれた時代のひとつの姿勢ではある。事実、氏は自立する女性の典型であった。

『和泉式部日記』に「なにのやうごとなききはにもあらず。(略)そがなかにも人々あまた来かよふ所なり」と、『紫式部日記』にも「和泉はけしからぬかたこそあれ」と評され、藤原道長にも「うかれ女」と揶揄された(『和泉式部集』、二二六の歌の詞書)和泉式部である。醜聞と悪名、嬌名をならした、その「なか」に意味を探ろうとする。単なる愛惜ではない。

和泉式部の作品化は、「いつかは書きたい」という素懐であった。こゝとさらな「もう書ききれぬ年齢に、私も達したように思います」に、自負心をのみこめてはいるまい。ようやく「達した」初心ものぞく。

自伝『いずこより』(昭四九・一・五刊 筑摩書房)に、小田仁二郎の『和泉式部日記』をふまえた、「独白体の短編」を読んだ時からの宿案といっている。昭和二十八年十月五日発行『文学者』40号に発表した

『空ゆく月』である。また、氏の無名時代、文学修業時代のことである。小田仁二郎（明四三・一二・八〜昭五四・五・二一 1910〜1979）について、少女小説や童話の作家「三谷晴美」が「文学の手ほどき」を受け、「小田仁二郎との歳月」とその「訣別」とがなければ、「私の作家としての現在にはなかつたろう」（『小田仁二郎の訃』、昭五四・七『文学界』）という。なるほど、『女子大生・曲愛玲』（昭三一・一二『新潮』）で第三回新潮社同人雑誌賞を、『田村俊子』で第一回田村俊子賞を、「訣別」の翌々年、『夏の終り』（昭三七・一〇『新潮』）で第二回女流文学賞を受賞して来ている。すでに不動だ。

『空ゆく月』は誌面で十三ページに足りない、文字通り、珠玉のような好短編である。原典の『和泉式部日記』を正面にすえ、それをなぞり進み、けれん味はない。弾正の宮為尊親王の死後、一年近い「四月のなかば」に始まり、年末まで帥の宮敦道親王との途切れ勝ちな交情を語る。簡潔に、暢達に、丹念に、洗練をきわめた筆致で描く心理小説である。払いのけようのな憂愁が全編を覆っている。偽りとも誠ともなく、頼むともなく頼り、訪れをこぼみ待ち、小刻みにゆれる心情の變々を吐露して、次第に傾斜しながらも、行方の定まらぬ恋を描く。透明度、結晶度は高く、あわれな叙情は至純だ。この作家の決して凡庸でない力量をうかがわせよう。

和泉式部を描いた作品といえば、数篇がすぐに思い浮かぶ。

森三千代『小説和泉式部』（昭一八・八・二五刊 協力出版社）、海音寺潮

五郎『和泉式部』（王朝もの作品集『王朝』、昭三五・七・五刊に収載、なお

『続王朝』は昭三六・三・一五刊 いずれも雪華社）、川口松太郎『孤愁和泉式部』（昭五六・一・二八刊 講談社）、大原富枝『わたしの和泉式部』（昭五八・九・二五刊 中央公論社）、三枝和子『小説和泉式部「許子の恋」』（平成二・一〇・一〇刊 読売新聞社）、ほかに、戯曲に北條秀司の四幕『和泉式部』（『北條政子 北條秀司戯曲選集』、昭四八・一・五刊 青蛙房に収載）、秋元松代の三幕六場『かさぶた式部考』（『かさぶた式部考・常陸坊海尊』、昭四五・一一・二〇刊 河出書房新社に収載）など。『煩惱夢幻』をまじえても、これら長短編に堂々伍して、『空ゆく月』はきわやかに光彩を放つ。しかし、骨太なスケールに支えられた『煩惱夢幻』は、繊細な『空ゆく月』とは別趣である。影響を残していない。この長編は前掲の通り、九種の花をもって章名に採っている。それらを「色」と断じたのは馬場あき子氏である（角川文庫『煩惱夢幻』の「解説」、昭四九・六・三〇刊 角川書店）。私見では花の名前であるよりも、「恋といふ色」、恋の色々である。すなわち、『和泉式部集』に、

98 世の中に恋といふ色はなけれども深く身にしむものにぞありける

『煩惱夢幻』一編の主題は、部分的に留保をつけるが、この一首にかかっているだろう。色とりどりの恋をした和泉式部にとって、「恋といふ色」は伝統的な、多分、「くれなる」に限定されない。作中、序章「むらさき」でおとめ時代に愛唱した萬葉歌、額田王の「あかねさす紫野ゆきしめのゆき野守はみずや君が袖ふる」を挙げる。複雑な恋の「生涯」を予見させたのである。この二色を配して、頭尾の章名に設定したもの

だろう。他は、それに類する。

「世の中に」の歌には、恋の煩惱に身をせめた真情が自照されている。さまざまな恋も「夢幻」と化し、無に帰す。ひととき華やぐ、それぞれの泡沫にすぎまい。なればこそ、終生あこがれ、身をこがし、色々に染まってもみる。煩惱の永遠たるゆえんだ。直叙の歌は自身の命を極めていよう。倒置して詠んではない。和泉式部の観照は生のかぎり無量、無限に到達して行く。

この長編は巧妙、非情、強引な仮構をもってして、にわかには終息する。標題にいう通り、「煩惱」の夢幻を物語る。作品の末尾は次のように、一条帝の死で結ばれる。だが、前段をもうけ置いた用意を看過してはならない。二段構えに仕組んだ、最終章「あかね」である。

帝はすでに口辺におだやかな微笑を浮べられたまま、息をひきとられていた。／今、式部は自分の長い生涯の幕が静かに下りたことを感じていた。たといこれから幾年、生きながらえてもそれはもはや、自分の青春のひくはかない影だけにすぎないことを識っていた。

主人公は弾正の宮、和泉守橘道貞、花山院、帥の宮、藤原道綱、武人保昌、牛飼の少年など交渉を持った、大半の男性たちが死に行き、一条帝の死を看取って、「自分の長い生涯」の終幕を観じる。「青春のひくはかない影」には、後半生の「煩惱」が消去されている。つぎつぎに訪れる死の累積の果てに、茜さす残光の中に、美しく佇立させたのである。

その前に、主人公の上東門院出仕と罷免を物語り、牛飼の少年との仮そめの恋と死が寸描されている。藤原道長とその家司藤原保昌、主従ふ

たりのなせるわざである。

道長は中宮彰子の藤壺に、紫式部や赤染衛門らに欠けた色めかしさを添えようと、「当代一の男殺し」の出仕を求める。一条帝の不断の訪れを促し、歓待するためである。登用の奏効するや、敵視される。一条帝の関心が「恋なれた女」に移ってしまったからだ。危険な功労者を道長は腹心の保昌に、妻にと勧め、藤壺から、洛内から追ひ、夫の任地に赴かせる。他は、『古今著聞集』巻第五の「二〇一 和泉式部田刈る童に襖を借る事並びに同童式部に歌を贈る事」をアレンジした構想である。恋歌を献じて、一夜の情をかけられた少年は、夫保昌の太刀で斬り殺されてしまう。丹波の国に下って、主人公三十六歳の「生涯」は終わっていたのである。

幾重にも終幕を降して、さらに、一条帝の死に際会させて、多彩な「煩惱」を「夢幻」の彼方に封じこめたのである。

翌昭和四十一年に出版をみた『とはすがたり』注釈三著のうち、いち早く、瀬戸内氏の購読したのは第一の刊行、富倉訳のそれに相違ない。新登場の女流日記を指して直進したのだ。『煩惱夢幻』の作者は余勢を駆って、王朝女人もの第二作の構想を抱いているからであろう。『とはすがたり』邂逅と『祇園女御』構想を組む時点とは一致するらしい。両々あいまつものらしい。

なぜなら――。

初めて、瀬戸内文学が『とはすがたり』を語るのには、『祇園女御』の序章「その後の世に」である。章名とはいいがたいこの見出しから、そ

れを特設したことは明らかだ。新出の『とはすがたり』全編の概要を解説、紹介したという体ではない。必らずしも、それを怠っているわけではないが、かなり特異な、偏頗なものといえよう。『祇園女御』の「出生についての疑惑」をところという、意図によるからである。巻四、五への言及は乏しい。興味の所在は前半部に片寄る。その中に、次のような原典巻一の引用がある。隻語なりと注目したい。

——とかくしつ、あまた夜も重なれば、心に沁む節々もおぼえて——

が、富倉本の原典翻刻部の

又あるべしとも覚えすよ。とかくしつ、数多夜も重なれば、心に沁む節々も覚えて、いとと思ひ立たれぬ程に、

に照合できるからである。

付言になるが、呉竹同文会本、次田本および桂宮本の当該部はそれぞれ次の通りである。桂宮本には、五年後に参看するらしい。後述する。

・又あるべしとも覚え、はてはかくしつ、数多夜も重なれば、心に沁む節々も覚えて、いとと思ひ立れぬ程に、

・またあるべしとも覚えはてす。(一行アキ) かくしつあまた夜も重なれば、心に沁むふしぶしも覚えて、いとと思ひ立たれぬほどに、

・又あるへしとも覚えはてよ、かくしつ、あまた夜もかさなれば、心に沁むふしもおほえて、いとと思たれぬほどに、

やはり、氏の『とはすがたり』邂逅は富倉本による、と推測される。

断定してもよからう。

『祇園女御』の序章には、次のような概要がある。氏の『とはすがたり』享受の全身投入的な特徴を示しているよう。疑いを持たぬ。初発の、鮮度の高い肉声は重んじなければならぬ。「光源氏が幼い紫の上を、昔の恋人の姪だという理由でひきとり、その成長を待ちのぞみ妻にしたのと、まるでそっくりな上皇と二条の関係は、そもそもから物語めいているが、二条は、貞淑で理想的な紫の上にくらべ、はるかに情熱的で奔放な血を持っていた」という。

このあたりの叙述から、『とはすがたり』における体験的事実の告白と虚構というような、こちたき問題も引き出せよう。が、氏は遅疑しないで、「そもそもから物語めいている」と指摘するだけで、やすやすと越えてしまう。瀬戸内文学の方法がそれに等しく、親近感を持ちこそすれ、いっこうに抵抗感などないらしい。

むしろ——。後深草院と二条との関係を、光源氏と若紫とになぞらえてみずから物語ったのが、『とはすがたり』の一基本構想である。これを「そもそもから物語めいている」と、『源氏物語』を立ててさりげない。さりげなく、作家は自己韜晦したのである。双方の間には、藤壺の宮があったように、こちらに二条の母、大納言典侍が介在する。これを重視しているのだ。ゆかりの物語にとどまっていまい。「物語めいて」は、氏の『とはすがたり』作品化、その構想を秘蔵していることを窺わせよう。作品化に着手しているのだ。つづいて、

上皇の寵姫でありながら、二条は、上皇以外の男幾人とも通じてしま、その男たちの子供を何度か妊っている。／紫の上の身の上に、

和泉式部の情熱的な恋の経験を加えたようなのが二条の劇的な生涯だったといえるだろうか。「とはずがたり」は、二条が、晩年、世の無情を悟り、出家して女西行のように全国を流浪して歩いた後、自分の愛欲生活のすべてを大胆率直に書き綴った日記である。

と。『煩惱夢幻』完稿という階梯を踏んだ作家の、それを引きながら巻一、二、三への没頭は深く、後半部への関心は薄い。「世の無常を悟り、出家して女西行」云々は、いかにも冷淡だ。

二条の愛欲遍歴は、もしかすると、後深草院の政治的な策謀に通じる容認、配慮、放任かも知れぬが、そのような観点なり、疑念は皆無だ。二条をめぐる男たちは、錯綜した京都政界に覇を競う権門勢家である。後深草院はもとより、すでに緒についた持明院統、大覚寺統の交代迭立のもと、政敵龜山院であり、摂政関白太政大臣の鷹司兼平であり、鎌倉幕府との要衝、関東申次の西園寺実兼である。暗闘をまぬかれているのは、ひとり、古式ゆかしい歌語「有明の月」と仮名される、仁和寺の性助法親王である。女犯破戒におののきながら、凄艶たる妄執の愛欲図をくりひろげる。

仮名で対照的なのは、実兼の「雪の曙」である。『枕草子』の「春はあけぼの」をふまえるとしても、破格ではあろう。たとえば、『新編国歌大観』第一巻勅撰集編(昭五八・二・八刊 角川書店)には新勅撰、玉葉、続千載、続後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新続古今、新葉和歌集などに用例歌が散見される。関東申次という、時代の要請した家職にふさわしく、中世の新語、流行した歌語を当てたものか。この時代人、実兼を

視点人物に設定した、杉本苑子『新とはずがたり』がある。この意味でも、氏の長編は王朝、平安朝とは画する鎌倉時代の歴史小説である。

瀬戸内氏の『とはずがたり』享受に、歴史認識などなおざりにされる。いわば、和泉式部以来の王朝日記であり、紫式部に総括される。直入して、何よりも生身の母性で受けとめている。

祇園女御は、作者によって「たまき」と名づけられ、数奇な運命に弄ばれた女性の呼称である。この『平家物語』巻第六や、吉川英治『新平家物語』の発端部に描かれて著名な、白河法皇寵妃の物語は、『とはずがたり』の物語と関連はない。彼我、「百七十年」ほど隔たる。平清盛の生母に擬せられるが、謎は多い。その出自も、経歴もいっさいが不明だ。氏の創意はここに働く。

序章で、『とはずがたり』を詳述するのは、二条の生んだ子たちの行方に「想いをよせた」からである。出産した四子に、命名すら記録されていない。院の皇子は生後一年で夭逝する。実兼の、法親王の子たちの行方は知れない。闇にほうむられる。わけて、実兼との間に妊った子の、あの凄絶な出産場面と、産室からいずこともなく運び去られてしまう処置は、氏ならずとも感銘しよう。罪の子の蒙った処置であり、不幸な運命ではある。

氏自身も、一女を生んで離婚し、その成長や適齢期を迎えた成人ぶりを思いやるしかない、悲嘆に重ねて読み取ってしよう。みずからに、烙印は押している。「子を捨てたという負目と罪悪感は、私に終生ついて廻るものであり、死の日までそれは消えないものであろう。私の描く女

たちは必ずとっていいほど、自分が幸福になることを極度に恐れている。子を捨てた女が幸福になってはならないのだという意識が、常に心の底に秘められている」（『わが文学の履歴』）という。

『とはずがたり』は、「子を捨てた女」の痛切な自覚を、ひとしお喚起したに違いない。捨てられた子の行方は、『祇園女御』執筆のモチーフである。将来、『とはずがたり』作品化のはらむ構想、大納言典侍の子物語に通じよう。早くも、先鞭をつけておいたのである。

ところが、もう一つ序文がある。次章「花の雨」が、実質的にこの長編小説の縁起談になっている。機能的な導入部だ。序章の肉声は諸言、大序といふべきか。

『祇園女御・花野』二作品を収めた『瀬戸内晴美長編選集』第四卷（昭四九・二・二〇刊 講談社）所載パンフレットの自作「解説〈四〉」によると、「花の雨」章の記述は、物語の典拠に仮託した古書「ぬばたま記」を除いて、他はすべて事実談であるらしい。

創造した「ぬばたま記」は「五帖の和とじ本」といい、「ある院に取材した宮廷の日記」という。「王朝の女流日記は、もうすでにほとんど発見研究しつくされていて、今更、こんな日記が新しくあらわれるということ」に一驚する。また、「この手記の中に溺れこみ、王朝の末路に生きたひとりの女の生涯の哀歎に、身をゆだねる」という個所などは、氏の『とはずがたり』耽読、感慨を念頭に描いたものと猜せられる。

けだし、命名「ぬばたま記」とは『とはずがたり』前半部である。男女の密事も、子の行方も杳として呑みこむ、闇夜のものがたりであろう。

それを「菜種梅雨」のころに譲り受けたという仮構も、富倉本の入手時に吻合するからである。――

瀬戸内氏は『とはずがたり』に二条を見、その人にわが身を見たのである。事実の告白と虚構とをないまぜにした手法も、親しい共通項であった。転居癖、着物好み、大酒家までも似ている。等質、同等のふたりの遭遇であった。

それは芥川龍之介の『今昔物語』羨望、谷崎潤一郎の王朝憧憬とは異なる。自己対面、自己客観化が「心理的転機」を促し、永く『とはずがたり』そのものへの固執をきたす。

（未完）

注 本学教授神野藤昭夫氏を通じて、八島氏よりうかがったもの。また、『女人源氏物語五』（平成元・八・一〇刊 小学館）所収「月報五」の「寂庵対談・出家して初めて見えたこと」でゲスト八島正治氏とともに、同様のことを語っている。